

中学部の取り組み

(1) 研究方針

- ①研究目的を確認し、事実上の研究は、個々の授業研究が中心となることを共通理解する。
- ②中学部としては、「各教科の学習で、難聴児支援教材研究会の視覚教材を使うことによって、生徒はより正確に学習内容を理解することができるであろう」を研究仮説とし、自立活動、各教科における文法指導のあり方を探っていく。(一人一事例はいずれかを選択してよいとする)
- ③②を具現化するために以下を確認する。
 - ア書記日本語による情報を理解させることを「わかる授業」の条件として置き、教科書のどの文を理解させるために、生徒の実態に応じて、視覚教材をどのように扱うのか、授業のどの場面で、どの程度それを設定するのかに焦点をあて、指導計画を立てる。
 - イ難聴児支援教材研究会の視覚教材が、小学部低学年段階を対象としていることを踏まえつつ、全員が実践をとおして、視覚教材の扱いに慣れ、活用スキルを身につける。
 - ウ日本語文法に裏打ちされた指導になるよう教師も文法を学ぶ。(HP や YouTube 等を参考にする)
- ④自立活動の学習内容としての文法指導を充実させることは必須であるが、今年度は、その素地を作るために、各教科間、教科と自立活動との連携のあり方を検討し、自立活動の流れ図の質を担保する情報を充実させる。その過程で、中学部段階での指導課題を明らかにする。
- ⑤④に照らし、それぞれの授業研究の成果と課題は、各教科の立場から捉えられた情報として共有することで全体の指導力向上に繋げる。故に、授業参観等は事前に連絡し合えば自由に行えることとする。
- ⑥研修会の企画、運営に関しては下記の通りとする。
 - ア学部研修は定例日に研修部が中心となり企画、運営する。研修後に意見を集約し共有する。
 - イ必要や要望に応じて臨時的に教務と連携し研修会を設定する。
 - ウ研修内容は聴覚障害教育での何の指導に必要となるのか、実際の指導場面との関わり等、位置づけを示し、検索のキーワードがわかり自主研修しやすいように配慮する。

(2) 研究計画と研究経過 (計画以外で実施した研修→○ 取り組み実践に配慮した研修→●)

学 期	中 学 部 研 修 内 容
1 学期	* 文法指導を理解し、指導に活用できるように文法について理論研修を充実させる。
5/11	・学部研修計画提案 → 研修内容確認。
5/18	○小学部2年生「受動文」の授業参観(録画)。難聴児教材研究会の視覚教材を使った文法指導を学ぶ。
5/25	○小学部2年担任(伊波興穂)の出張授業。一般クラス対象の文法指導(品詞分類)
5/26	○生徒指導にある3観点、問題行動と指導のあり方。(言葉でわからせる、聞き取るときの配慮について)
6/1	・指導力向上について議論できる「研究授業」をするための前提を確認。 (教科学習の中で取り組む文法指導、3観点評価による評価、助詞(手話)の推奨、 (視覚教材で取り組む指導方法、品詞カードと助詞カードの活用方法)
6/7	●文法指導を継続させるという視点で取り組む指導について(文を作るまでの段階) ●わかるために何を調べるか。(品詞論、形態論、統語論、品詞とは文法的な性質を示す)
6/10	●日本語文法の基礎知識と読みの躰きについて
6/24	○小学部研究授業参観 2年生国語「スイミー」教科における文法指導を学ぶ。
7/15	・文法基礎知識(助詞)確認。(助詞ではない「に」について。例:副詞ただちに)
8/2 (全体研修)	木島氏講演「だれにでもできる文法指導」ワークショップ「品詞カードを使った構文図」
8 月中	・視覚教材作り { 品詞カード、助詞カード、助詞の意味と使い方、助詞表 動詞活用表、動詞活用五十音表
2 学期	* 授業改善を重ね、検証することで、文法指導のスキルアップをねらう。

9/12	・学習指導要領に照らした観点別評価と学習内容にみる文法（事項）指導。 （評価規準に文法事項を入れることの必要性）
9/15	○木島氏による生徒のアセスメントを受け、取り組みについて方針を確認。 研究授業にむけ、各自、各教科と自立活動で授業改善に取り組む。
9/26	●文法の基礎知識を確認。（用言、動詞の活用、文の基本構造） ●受動文の指導方法を確認し、さらに、難聴児支援教材研究会 HP で各自確認。 （日本語が開放文法、動詞の活用、助詞、どの方向から捉え表すかの確認）
10/5	・国語科の取り組みを例にして、各自それぞれの進捗状況を確認。 ●文と句を意識できずに、主述を語順で処理する生徒 A に対するの複文指導の取り組み方を共通理解する。（日本語文法：複文従属節中にでてくる「の」は「が」に変換可能加えて、修飾と被修飾の係り受けも確認する。）
11/2	●生徒 B に対して、受動文指導の取り組み方を共通確認する。 （○主語、助詞が方向や視点を定め、立場を理解する前提になる＝ものの見方を学ぶ）
12/7	・情報共有のために、全員が書き込める「教科間相関図（仮）」を学部室に貼り情報共有を図る。（次年度の指導計画の資料とする）
12/15	・授業改善に関する意識、取り組みに関する意見の集約を実施。（12 月アンケート）
3 学期	* 授業実践から課題を明らかにし、改善にむけて今後の取り組みの方針を決める。

(3) 研究の実際

①理論研修

難聴児支援教材研究会の視覚教材（文法指導）を実践的に活用する上で必要となる文法について、一学期に上記で示した研修を実施し、二学期は、研究授業の取り組み状況に合わせて必要となった文法事項（上記）を随時、理論研修することで、研究の充実を図った。また、各自が難聴児支援教材研究会の HP や YouTube を視聴し自主研修した。

②取り組みの実際

「研究方針の③」に基づき、「●の理論研修内容（上記研究経過経過）」を学びながら、各自がそれぞれ、生徒の文法課題に対し、自立活動と各教科で授業実践したことを報告する。（表 2）

中学部には一般クラスに 3 名
重複クラスに 3 名の生徒が在籍している。

表 1 指導グループ

グループ 1（生徒 A）	グループ 2（生徒 B）
自立活動担当（体育） 国語 社会 理科	自立活動担当（音楽） 国語 数学 家庭科

ここでは J. coos の検査結果をもとに一般クラスから二名

を抽出した。それぞれの自立活動担当者を中心にして、職員を二グループ（表 1）に分け、情報を共有し、連携しながら文法指導を組み込んだ教科指導を行った。

研究目的の一つである連携をはじめとする「組織体制」を構築する目的でなされる情報共有は、指導項目を絞り込み、全員のベクトルを揃える必要がある。さらに、アセスメントが正確でなければならない。そこで、J. coos の結果分析を木島照夫氏に依頼した。木島氏より助言を受け、比較文テスト、助詞テストを合わせて実施した。木島氏からの検査結果の所見に基づき、指導の方向性を全体で確認し、各自で指導計画を立て実践し、その後、情報を共有することとした。

表 2 文法指導の概要

生徒	木島氏による検査結果と分析	必要となる文法項目に対する指導方法	教科	取り組みの概要 （表の左に対して行った例）
A 人工内耳 装用：右 平均聴力 20 dB	J, coos 通過項目 12 項目 （小 1～2 年レベル） 主な課題 ・ 14 受動文 受動文を能動文として 読んでいる。	・ 動詞の活用ができていないことを意味するので、動詞活用	全体	* 教科書の何を理解させるためにどの文を文法指導の対象とするのかを定めて取り組む。 * 文法項目を難聴児支援教材研究会 HP、YouTube で確認、参考にして文法指導する。

	<p>授受表現、使役表現もできていないと思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15 比較表現 ～よりの理解が不十分 ・17 述部修飾 名詞句が理解できていない。「。」までが一文という規則を理解していない。 ・19 格助詞 「が」「を」を逆語順になっても正語順で読んでいる。 ・助詞「が」「を」「に」「で」「と」の理解が不十分 	<p>表を使って動詞の活用を指導する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二つまたは三つのもので比較を確認。助詞「より」の理解が不十分、助詞を整理して指導する。 ・品詞カードを使って、名詞句、複文のしくみ、作り方を指導する。 ・日本語は語順ではなく、助詞で決まることを再確認する。 ・助詞「が」「を」「に」「で」「と」を再度指導する。 	<p>自活 比較文</p> <p>品詞 動詞活用 複文</p> <p>国語 動詞 時数詞</p> <p>受動文</p> <p>使役文</p> <p>理科 名詞句</p> <p>受動文</p> <p>社会</p>	<p>* 自立活動では、この表に挙げられた文法項目を優先して取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語の語順について確認し、各助詞と「より」の理解を重視し、比較文を指導した。 ・「複文」指導をするにおいて躓きが認められたので「品詞分類」「時数詞」「名詞」「動詞活用」の項目について学び直し、それを全体で情報共有した。 ・小説「握手」では、回想文の特徴を文末表現に注目させ、動詞の活用形と時制、時数詞で表現されている時制を確認させて理解に導いた。 ・登場人物の人間関係を理解させるために、事前に受動文を指導し、教科書の本文の読解に繋げる。読み取りの程度を人物相関図を書かせて確認する。 ・人物像を捉えるのに必要な場面にある使役文を読解させるために、事前に使役文を指導。本文を「構造図」を使って整理し、理解させる。人物像を一文で書かせて、確認する。 ・教科書文の特徴に長い名詞句がある。それを理解させるために、構文図を使って教科書文を指導した。 ・単元「仕事と力学的エネルギー」の「仕事」の意味を理科の範疇で理解させるために、受動文を事前に指導。「物体が力を加えられ、その方向に移動した場合にエネルギーを得た」とい、それは仕事をされた」と理解するという理科的な考え方に繋がった。 ・「流通」の流れに方向があることを、受動文を学ばせることで、理解させた。生産者と消費者の立場の違い、複数の視点とそれに伴う方向の理解が両者の関係性を踏まえた考え方に繋がった。
--	---	--	---	---

B	<p>J. coss 通過項目 16 項目 (小学校中学年レベル)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 14 受動文 ・ 17 述部修飾 ・ 15 比較文 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主語と助詞の確認 ・ 動詞活用表を使って動詞の活用を指導する。 ・ 受動文、授受文、使役文、自動詞、他動詞の指導をする。 ・ 品詞カードを使い構文図にして理解させ、文のしくみを構文図にする練習をさせる。 ・ 助詞「より」の正確に理解させる。3つのものを比較できる思考過程を指導し、論理的思考に繋げる。難聴児支援教材研究会のHP「比較問題」の指導法を参考にする。 	<p>全体</p> <p>自活 比較文</p> <p>国語 受動文 動詞活用 他動詞と 自動詞 文型</p> <p>数学 受動文</p> <p>家庭科 文型 (複文) 受動文</p> <p>*教科書の何を理解させるためにどの文を文法指導の対象とするのかを定めて取り組む。 *文法項目を難聴児支援教材研究会 HP、YouTube で確認、参考にして文法指導する。 *自立活動では、この表に挙げられた文法項目を優先して取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が興味をもっている「サッカーワールドカップ」「ゲームのキャラクター」を例とし、チームを比較させ、助詞「より」の定着を図った。 ・教材「月を思う心」で古来、月が人間の日常生活と密接な関わりをもってきたことを理解させる場面で、受動文の文法指導を事前に行い、(主語を補って)本文の理解に繋げた。 ・受動文は能動文(3語文)にし、主語が変わることを確認。 ・毎時間10分程度の文法指導を継続している。(動詞の活用、受け身形をおさえる) ・単元「平面図形」で言葉と表現された状態を合致させるために受動文の指導をした。 例：「平面上の直線を含む。直線が平面に含まれる。」 「平面上にある場合、平面と直線が交わる、平面と直線が平行」という文を理解させる。 ・単元「中学生に必要な栄養」で必要となる栄養の説明文(主語が栄養になる受動文)の視点を人間(私たち)にして、能動文に書き換えさせ、視点の違いで文末表現が変わることを確認させた。能動文と受動文を比較させることで文意を深く理解させることを図った。
---	---	--	---

③ 「一人一事例の取り組み」

表2に記載した文法指導の取り組みを「一人一事例」にまとめ、報告する。

(4) 中学部の成果と課題 (各人の詳細は「一人一事例」原稿に記載)

① 成果

ア 12月までの取り組みの成果を J. coss 等の客観的な検査で確かめてはいないが、生徒が文法を意識するようになり、構文を理解してきていると手応えを感じている。

- ・定期考査（インフォーマルなアセスメント）：解答に表された文の助詞、主述の一致
- ・発表の場面：助詞の言い直し。動詞の活用形の言い直し。

イ教科制である中学部では、各教科それぞれの構造図板を必要とするが、それを教室に残したままにしておけない等、教室での掲示にも学部全体で確認した課題があった。それに対して、PPで構成図板をつくり、画面上で品詞カードを動かすという IT 機器を活用した方法等、学部の実情に合わせ工夫がみられたことは、試行錯誤の表れであり、時間経過と取り組みの質が比例関係にあると言える。現時点では成果と捉えたい。

ウ取り組みの実際の場面で感じたことの 15 項目（12 月アンケートの質問 7、複数回答可）全てにチェックが有り、チェック延べ数は 56 であった。それは、取り組みへの意欲、費やした時間であると捉えることができ、全員が取り組みの意義を理解していることは成果である。

エ難聴児支援教材研究会の視覚教材を中学部段階の教科指導で扱うときには、学び直し、学び直しへの対応ということになる。その困難さを各々が実感し、試行錯誤しながら、教科指導の学習内容に文法事項を織り込んでいけたことは、文法指導を肯定的に捉え、聴覚障害教育の課題への向き合い方の質を向上させたことになる。同時に、全体が学力向上を意図した教科指導の方向性を揃えたことになる。専門性に着眼すると、同じ題材に対し議論しあえる素地を作ったことになると思える。また、自立活動の学習内容の充実や、各教科と自立活動との連携のあり方の改善に繋がる。

オ現状において、今年度の取り組み方法は、視覚的情報保障を量的には担保できたと言える。

（課題にあげた文法事項に対して、対象になる生徒が受けた指導の回数は、8 回以上になる）カ成果として挙げられる内容、指導実践に深みが足りないことを皆が自覚しているが、教科指導力の向上を目指して、文法指導を継続したいという意欲や熱意が持続できていること、全員が自分の具体的な課題を確認できたことが成果である。

②課題

ア生徒は、教科の時間に文法を学ぶ場面がある授業に慣れ、受動文への理解は進んでいるが、日常生活での表現や思考を深めるための言葉として落とし込めていない。

イ実際の場面での指導のあり方、スキルアップ、指導の質が課題である。

- ・アセスメント：①J. coss の項目の系列を理解し指導できるか
- ②J. coss の分析や結果を適切に指導に繋がられるか
- ・教科書を文法的に読み解く力
- ・生徒の課題となる文法事項を限定し、適切な順序で指導できる力（①②J. coss と関係する）

ウ課題を真摯に受け止め、教師自身がそれを支える日本語文法力をつけることが課題である。

エ生徒の実態、取り組むべき文法課題、指導の進捗状況等、情報共有の場と時間の確保、正確で効率的な連携が課題である。

③今後の取り組み

学校全体として文法指導の一貫性を目指し、文法指導の持続を可能にするために、中学部の担う役割を考えると、小学部、高等部との連携強化、確実な情報共有が必要になる。小学部とは、小学部段階で学び残した学習内容と教科書の読解、理解に必要な文法事項についての情報を確認する。高等部には、今年度指導した文法指導項目と指導方法を生徒の実態に照らし、自立活動流れ図を介して説明できるよう整理する。

次年度は、基本的には今年度の取り組み方法を継続したい。取り組みの質、全体としての指導力を向上させることは必要であるから、全体での研修を充実させるために、各々が自分の実態を把握し、課題イで示した内容（三点）を自主的に研修することが重要になる。一貫性のある文法指導体制は、全員がある一定の指導力をもつことを前提とすることで構築できるからだ。

〈参考文献〉

- ・木島照夫 「きこえない子のための新・日本語チャレンジ！」 難聴児支援教材研究会 2019 年
- ・文部科学省「聴覚障害教育の手引 言語に関する指導の充実を目指して」令和 2 年 3 月

〈参考 WEB サイト〉

- ・難聴児支援教材研究会 HP <http://nanchosien.com>

1. 対象生徒：中学部1年1名（一般学級）

2. 単元名：1章 食事の役割と中学生の栄養の特徴 4中学生に必要な栄養

3. 生徒の実態と授業の概要

対象生徒は、比較的生活経験があるため、教師の発問に対して自分の実体験と関連付けて答えることができ、調理実習等も手際よく進めることができる。J.COSS 日本語理解テストでは「小学校中学年レベル。課題は、受動文、述部装飾等である。述部装飾の指導では、文のしくみが分かるように品詞カードを使い、構文図にする練習が必要」との評価を受けた。また、国語担当からは、「能動文を受動文に変える学習では、主語が変わることや対応する動詞はどれかの確認を行っている。」との情報が得られた。これを受け家庭科では、受動文と能動文を比較しやすいように構文図で視覚化し、主語と述語の関係を整理することで、文意の理解の深まりを図った。

4. 本時の目標（1/4時）

中学生の時期に必要な栄養の量や特徴について理解できる。（知・技）

中学生に必要な栄養について図「体の成長の様子」や表「食事摂取基準」から読み取れることを考え発表することができる。（思・判・表）

自分の食習慣について課題の解決に主体的に取り組もうとすることができる。（学・人）

5. 授業の様子

本単元では、まず、対象生徒がどの程度動詞の活用が出来るかを確認するため、教科書から動詞を抽出し、受け身形に書き換える学習を行った。「動詞五十音活用表」を見ながら「含む→含まれる」のように「う」の段を「あ」の段へと正しく活用できることが分かった。（写真1）。それを受け、教科書の文章「私たちが食べた食品は、胃や腸で消化され、私たちが生きていくうえで必要な栄養素などが体内に吸収されます。」の説明に入った。このように1つの文章に複数の主述の組み合わせがある複文では、主語と、述部の関係が分かりにくいいため、生徒は、語順の通りに解釈してしまう事が多い。そこで、文を2つに分け、さらに3語に単純化し、受動文と能動文を比較しやすいようにした。（写真2）（その際、主語を人間の視点にするため「体内」を「私たち」に置き換えた。）主語と述部の関係では、主語が変わると視点や文末表現も変わる事を理解させた。

次に原文に戻り、主語・目的語・動詞の関係性を整理した。生徒は、文中の「食べる」「消化する」「吸収する」の主語（誰が）や目的語（何を）を適切に答える事ができた。したがって、受動文と能動文の比較によって、複文への理解が深まったと考える。

6. 成果と課題

(1) 成果

・複文を単純化し、受動文と能動文を比較する事で主語と述部の関係が整理され文の理解が深まった。

(2) 課題

・複文の場合、語順の通りに解釈したり、述部に近い名詞を主語だと解釈してしまうことがある。助詞の活用を含め今後も主語と述部の関係について継続した指導が必要である。

・学習言語がの獲得が足りないため、実体験と関連付けながら語彙の拡充を目指す

・「視点を変える」の理解を促すために他教科と連携を目指す。



写真1 動詞を受け身形に変える



写真2 能動文と受動文の学習

1. 対象児：中学部1年1名（一般学級）

2. 単元名：1年国語科「月を思う心」

3. 生徒の実態と授業の概要

対象の生徒は、10月に jcross 日本語理解テストを受け、その分析結果から「受動文、授受文、使役文、自動詞・他動詞の指導が必要」というアセスメントが得られた。このことから、今回は受動文の学習に焦点を絞り取り組むこととした。

本教材では、「古くから観賞されてきた」や「歌や句に詠まれている」といった月と人々との関わりを表すポイントとなる箇所が受動文で書かれている。一文が長く主語が述部と離れているときは3語文程度に整理して提示したり、主語が省略されているときは述部（動詞）に対する主語は何かを確認しながら学習を進めた。

4. 本時の目標

古来から日常生活において人々が月と密接な関わりをもってきたことを、文中の受動文を手がかりにして読み取ることができる。（知・技）（思・判・表）

受動文を能動文に書き換えたときにすすんで主語が変わることを確認できる。（学・人）

5. 授業の様子

毎回の授業の冒頭の10分程度、文法について学習を重ねた。受動文では動詞が「れる・られる」がついた形（受身形）に活用するということや、手話での表現を確認し、動詞の活用の演習を行った。その結果、用意したプリントの単語では、初回で10問中10問正解であった。しかし、さらに別の時間に問うた際、未習であったりあまり使い慣れていない動詞では正解が得られなかったため、動詞活用五十音表を使って、動詞の基本形（ウ段）から受身形（ア段）に変化させ「れる・られる」をつけるというルールについても学習をした。このように、動詞の基本形から受身形への活用の理解を確認した上で、3語文程度の能動文から受動文への書き換えの演習を行った。この時に主語が変化することが理解できていなかったため、構造図を使って情報（主語・名詞）にあたる部分、助詞「が」がつくこと、述部にあたる動詞の活用をそれぞれ確認しながら、能動文と受動文の変化を確認した。また、簡単な絵を描いたり、手話を交えて動作をして見せたりすることで確認した。

本時の学習では「月が人々に観賞される」という一文に着目した。品詞カードを使い「人々が月を観賞する」という能動文を提示し、これを受動文にするには動詞はどんな形になるかを質問したところ「観賞される」と答えることができたため、品詞カードを使って受動文を作成させた(写真2)。その結果、正しく受動文を作ることができ、能動文と受動文で主語が置き換わっていることや助詞が変化していることを確認できた。さらに教師と生徒とで交互に受動文のときの様子を動作や手話で確認することができた。

6. 成果と課題

(1) 成果

・受動文とはどんなものか（動詞の変化、主語の置き換え、助詞の変化）という基本事項について学習し、文中の受動文をもとに読解を進めることができた。

(2) 課題

・もともと書かれた文章を整理して学習を進めたが、教科書の文章の理解を進めるためには学習事項の繰り返しによる定着とアセスメントで得られた他の分野の学習につなげていく継続的な指導が必要。

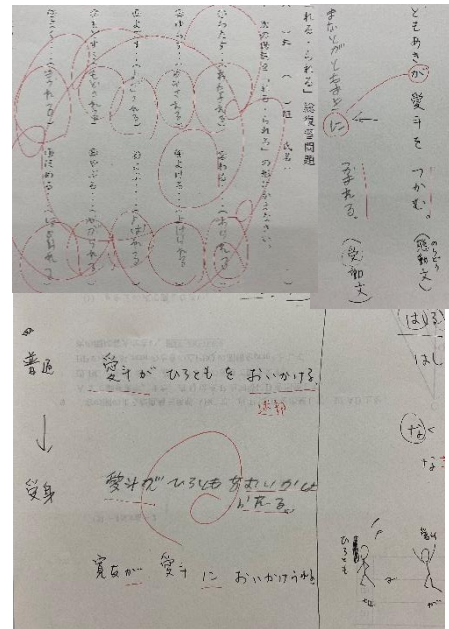


写真1 受動文の導入学習

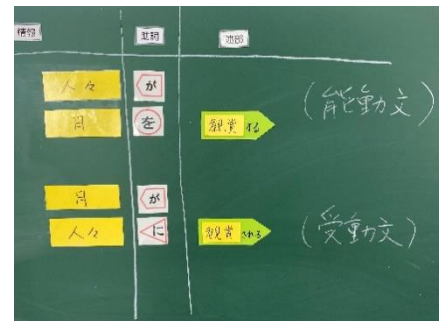


写真2 本時で品詞カードを用いた学習

1. 対象児：中学部3年1名（一般学級）

2. 単元名：3年国語科「握手」

3. 児童の実態（詳細は中学部の取り組みに記載）と授業の概要

生徒は、できごとを会話調で説明することが多く、限られた助詞は、誤用が少ない。文字情報の読み取りは苦手意識が強く、教科書を三行読ませることは至難である。普通高校への進学を希望していることもあり、回想文（文学的教材）の読み方を学ばせたい。まず、修道士、キリスト教、児童養護施設等語句について情報を与えて、登場人物の言動を背景を踏まえた上で読解できるように配慮した。次に回想文の読み方を解説してから、あらすじを理解させ、その情報を辿らせながら本文を読み進めるという段階を設定した。あらすじは省略された主語等を補って表し、時数詞、動詞の時制に注目させて、できごとの順序を整理させた。ルロイ修道士の根底に流れる「キリスト教的な考え方」を捉え、人物像を描くためには、使役受け身文の表現理解が必要である。さらに、前述の事柄に対し、後の事柄がそれと矛盾する内容であることを示す接続詞「～なのに」を理解させることで、「～されたのに・・・」であるルロイは「〇〇な人だ」と人物像を描かせ、それを文で表現させたい。

4. 本時の目標（9～/20時）

・過去に日本人から受けた仕打ちに対し、ルロイ修道士自身が、それをどのように受け止めているかを読み取り、(知技) その言動と考え方から、ルロイ修道士の人物像を捉え、書き表す。(思判表)

5. 授業の様子

本時の目標を確認する。目標に対してルロイ修道士自身が、与えられた状況を如何に受け止めたかをうわさの内容を根拠にして、読み解くことを学習の中心とした。読解には受動文と使役文の理解が必要であることを示し、それぞれの文型の理解を確かめた。(写真2) その後、文節に分け、助詞をマークさせた教科書文から、潰れて奇妙な爪になってしまった理由を読み取らせたが、一文の情報が多過ぎて難しそうであったので、構文図で示した。本文では、「監督官を主語にして書かれた

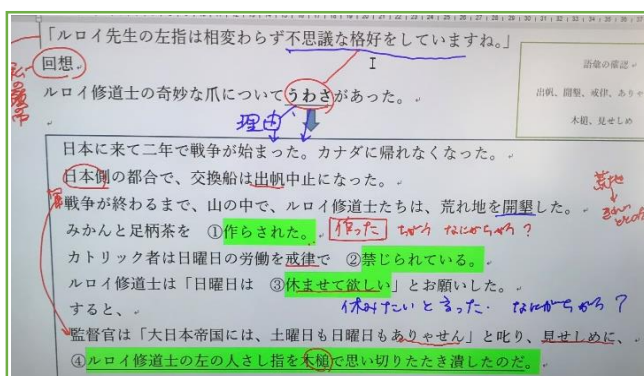


写真1 本時の授業

能動文」(写1④)を「ルロイ修道士を主語にした受動文」に書き換えさせ、行為を受けた側の立場を意識させた。ひどい仕打ちを受けたことを納得できた様子であった。動詞の活用は間違えた。主語と助詞を再確認した後で、接続詞「なのに」を手話で表現して理解させた。「ルロイが日本人に指を潰された。なのに、ルロイは日本人を・・・」と問いかけ「・・・」の部分を考えさせた。生徒は本文から「いつまでたっても優しくかった」の件を抜き出し「日本人を憎んでいなかった。」と追加して答えた。それをノートに書かせ、その根拠を本文から探し、書き足させた。「子どものために泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている」と書いた。さらに、ルロイの行為の根底にあるキリスト教的な考え方(神の前の平等)に照らし、ルロイの人物像を捉えさせ、文で表現させた。(写真3)

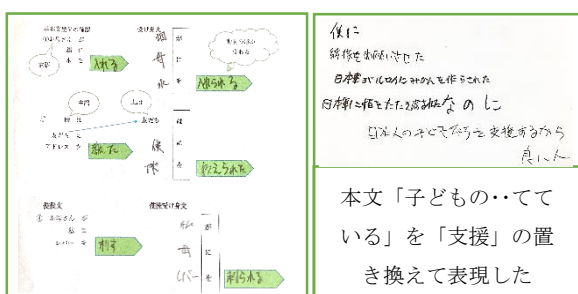


写真2 文型理解を確認 写真3 ルロイの人物像

6. 成果と課題

(1) 成果

ア 受動文は学部全体で取り組んでいるので、文の書き分けや主語の違いを理解でき、読解に繋げることができた。教師も文法を踏まえた指導計画を立てて授業改善を図ることの大切さを実感できた。

(2) 課題

- ア 生徒・教科書の文章を読解するために必要となる文法事項の理解。
 - ・文意の決定には動詞が重要だと意識できるようになったが、動詞の活用が不十分である
- イ 教師・読解させるために必要となる文法事項の整理と、授業展開における文法指導の時間配分。

1. 対象児：中学部3年 1名（一般学級）

2. 単元名：3年社会科「消費生活と流通の役割」

3. 児童の実態と授業の概要

- ・対象生徒は、2学期から国語の授業で日本語文法指導を学び始めた。
- ・Jccossでは、通過項目数12項目は小1～2年レベルで、文法力に課題がみられる。また、「14 受動文」は正答0項目であり、受動文をすべて能動文として読んでいる。
- ・本時の前に、国語の授業において、受動文の指導を行っている。

4. 本時の目標

(1) 社会の本時の目標

- ① 流通のしくみと役割を理解し、多様な販売形態の現状とその特色を資料から読み取ることができる。（知・技）
- ② 消費者として、広告について注意しなければならない理由を考えることができる。（思・判・表）

(2) 文法指導の本時の目標

- ① 能動文を受動文に、作りかえることができる。（知・技）
- ② 1つの場面や事柄でも、主語によって見方や表現方法が変わることがわかる。（思・判・表）

5. 授業の様子

教科書では、「流通」は「工場や産地で生産された商品を購入するまでの流れを流通という」と説明文がある。

受動文が入っている複文であり、対象生徒にとっては分かりにくい文章であることがわかった。

そこで、単文の能動文を受動文に作りかえる活動を通して、受動文の理解を進めていこうと考えた。

「工場」を「SONY」、「商品」を「プレステ」と、対象生徒の興味関心が高い具体物に置き換えた。（写真1）

「SONYが、プレステを作る。」という能動文を、「プレステ」を主語にした文章を作るように指示すると、「プレステが、SONYを作る」と答えた。写真1の「プレステ」「工場で働く人」「工場の様子」を示しながら、「プレステが工場の人を作るって変だよ」と指摘すると、動詞の活用表を使う前に、ひらめいたように「プレステが、SONYに作られる。」と正しく答えることができた。

ここで、「1つの事柄でも主語が変わると表現方法が変わる。表現方法が変わっても、同じ事柄である」ことを押さえた。

さらに、教科書の文章になぞって、「SONYで作られたプレステを、購入するまでの流れを流通という」と簡単に説明すると、対象生徒も「うん、うん」と頷き理解をしている様子であった。

また、授業で活用したプリントでは、「流通」を能動文で説明し、これも「同じ事柄である」ことを押さえた。（写真2）

6. 成果と課題

(1) 成果

能動文から受動文に作りかえる時に最初は間違えたが、すぐに正しく作ることができた。受動文の学習を国語の授業で行っているので、自分で間違いに気付くことができたと考えた。対象生徒に、社会科でも受動文の指導をすることができ、学部として受動文指導を積み重ねることができたと考える。

(2) 課題

教科書の「流通」の説明文には「『消費者が』という省略された主語がある」という説明をしていないことに気がついた。普段の授業から、生徒の実態によっては、主語を補う必要があることを念頭に置きながら指導を行いたい。

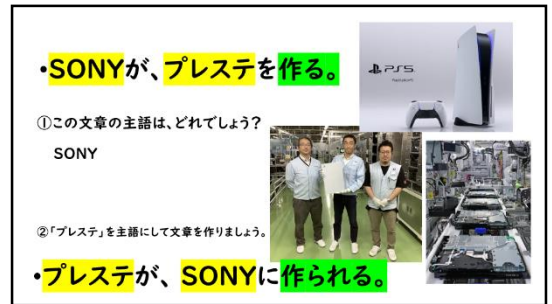


写真1 能動文と受動文の学習



写真2 能動文で説明したプリント

1. 対象児：中学部 1年 1名（一般学級）
2. 単元名： 1年数学科「直線と平面の位置関係」
3. 生徒の実態と授業の概要

対象生徒は、1学期から助詞の活用を使って、文字式のルールや数式の変形方法を理解してきた。加法と減法の計算で、次のような考えで間違いが多かった。

$$\bigcirc + \triangle = \square \Rightarrow \bigcirc = \square - \triangle$$

「足す・足される」、「引く・引かれる」の関係で記号+（プラス）と-（マイナス）の意味と使い方に戸惑うことが多く、文章題でも見当違いな解答を出すことが多かった。そこで、名詞（数・文字・対象物）、動詞（合わせる、加える、引く、減る）、副詞（多い、少ない、大きい、小さい）に分かれた文章で数学独自の考え方や指導者の説明を視覚的に提示し、生徒の理解度も名詞・動詞・副詞カードを実際生徒に組み立てさせながら確認していった。すると、文字式における数の変化や、文字xの値の求め方、そして等式で数を移項（いこう：右辺または左辺の項を、符号を変形して他の辺に移す操作）することが、自らできるようになり、1次方程式の計算は一様にできる状態になった。そこで本時においても、同様の考え方として「含む・含まれる」の関係が示されており、それが理解できることをねらい、実践を行った。

4. 本時の目標 (9時間/18時間)

空間内にある平面と平面、平面と直線、直線と直線の位置関係を理解する。(知技)

知識を活用し、身の回りの物を活用して空間と平面と直線の関係を説明してみる。(主)

5. 授業の様子

本時の学習に入る前に、空間での平面と直線の捉え方を確認する。身の回りの物で例えさせて、鉛筆は直線、教科書を平面、教室全体を空間とした。そこで名詞（平面、直線）、動詞（ふくむ、ふくまれる、交わる、平行である、上にある）、助詞（は、を、に、と）を準備し、はじめに

平面(は)直線(を)ふくむ

と提示する。次に、文章の状態を、鉛筆と教科書で表現させる。続けて、

直線(は)

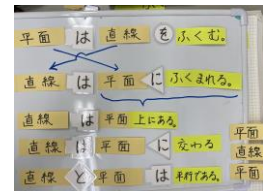


写真1

だけを提示し、続く名詞や助詞、動詞を考えさせた。その内容に入る

前に「食べた・食べられた」「見た・見られた」「置く・置かれた」などの能動文と受動文について確認を行った。生徒の理解が不十分だったため、次のように名詞（平面）を付け足す。

直線(は)平面

すると、時間はかかったが、「ふくまれる」という言葉が出てきて、「間に入る助詞は何ですか？」の質問に対し、「に」と答え、指導者は、「に：場所」の手話を意識して見せ、その「ふくまれる」が「上にある」という言葉と同様であると説明する。(写真1) その後に、直線と平面の関係をあらゆる場合を設定し、説明させたが、名詞と助詞の並べ方に気を付けて文を書くことができた。

最後の「上にあるもの」の関係として「交わる」と「平行である」があると説明を加えて、直線と平面の3つの関係について、鉛筆・教科書を使って説明することができ、本時の内容が理解できたと考える。

6. 成果と課題

(1) 成果

- ・数学のルール文を名詞と動詞に分け、能動文と受動文を意識させることで、状態を言葉で表現し、空間図形のイメージを膨らませることができた。

(2) 課題

- ・すべての単元で活用し、継続して指導していくことが必要である。

一人一事例の取り組み

1. 対象児：中学部3年 1名（一般学級）
2. 単元名：3年 理科「エネルギーと仕事」
3. 児童の実態と授業の概要

対象生徒は7月に実施した Jcoss 日本語理解テストの結果から、名詞句や受動文、比較表現の理解が難しいというアセスメントが出た。理科では、条件の提示があつたり順序の説明が加わったりと文章が長く複雑になりがちである。そこで実験の目的や手順の説明で文法指導を取り入れ、「実験は何のためにやるのか」

「目的のためにどんな作業をすればよいのか」を読み取ることに取り組んできた。（写真1）手順を理解して実験を行うことが出来つつも、目的と結果を照らし合わせて考察に至るには難しい状況が続いている。

本単元では「仕事」というキーワードが出てくる。日常で使う「仕事」とは意味が違うので、物体のエネルギーの変化に着目して定義を理解する必要がある。対象生徒が苦手とする受動文が頻繁に使われる単元でもある。「仕事」をする、されたという状態を実際に体験しながら、教科書にある能動文と受動文を教師と一緒に確認した授業実践である。

4. 本時の目標 (5 / 1 2)

- 物体に「仕事」をするとどのような状態になるのかを理解し説明することができる。（知技）
- 仕事を求める式「力×距離」が定義であることをふまえ、仕事を求めることができる。（思判表）

5. 授業の様子

理科で言う「仕事」とは、①物体に力を加える（物体が力を加えられる）②物体が移動してエネルギーを得ることである（力が仕事をした、物体が仕事をされた）。教科書の例にある「ボールに力を加えるとボールが飛び出して（移動して）運動エネルギーを得る」ことを実際に生徒が体験して、ワークシートの図（写真2）で振り返りながら口話による説明を行った。その後、品詞カードを使って文章のつくりを確認した（写真3）。

他にキャスター付きのイスを生徒に押させた。この場合、何が「仕事」をしたのか「仕事」をされたのかを確認した。生徒は「仕事をしたのは自分、されたのはイス」と答えている。次は教師が生徒と交替してイスを押し「仕事をしたのは加えた力、されたのはイス」であることを確認した。その後、仕事を求める式（加えた力×力の向きに移動した距離）を紹介した。生徒は「加えられた力で物体がどれだけ移動するかをみれば、物体が得たエネルギーが分かる」とまとめている。

演習問題では、正解率は6割前後であった。特に仕事がゼロになる場合（加えた力の方向に移動しない場合）の理解はできていなかった。

6. 成果と課題

(1) 成果

・体験的な学習と文法指導を組み合わせることで、物体に仕事をする（力を加える）＝ 物体のエネルギーを変化させるという「仕事」とエネルギーの関係について気づくことができた。

(2) 課題

・文章を読んでイメージすることが十分ではない。力を加えた方向に移動したのか、していないのか。または、違う方向に移動したのかをイメージできていない。イメージできる授業の工夫と、自活をはじめ他教科と連携した継続的な文法指導が必要であると感じた。

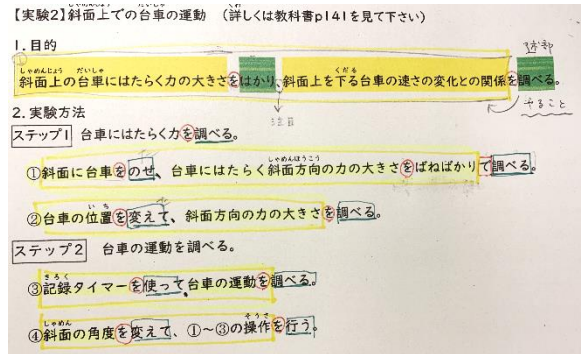


写真1 実験の目的や手順の説明

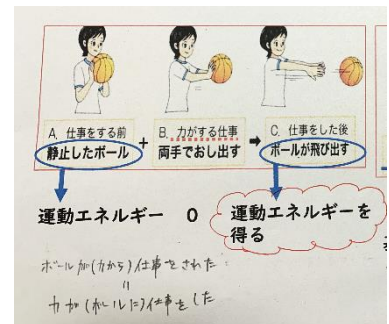


写真2 「仕事」の説明図

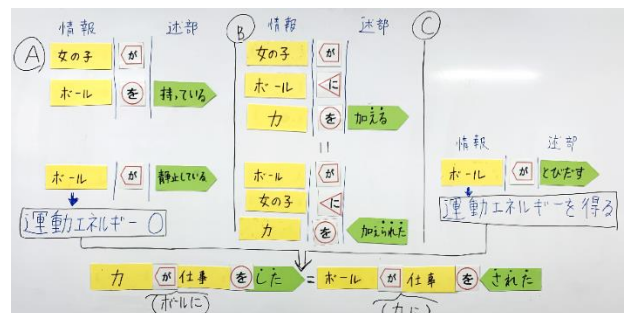


写真3 「仕事」の説明 板書

1. 対象児：中学部 3年 1名（一般学級）

2. 題材名：自立活動「比較表現」

3. 児童の実態と授業の概要

対象の生徒は、J. COSS 日本語理解テストを実施し、結果を検証している。その中で、「受動文」「比較表現」「複文（述部修飾・中央埋込）」「格助詞」について課題があったため、自立活動では、基本的な品詞分類を復習しながら連携を取り、中学部全体で課題解決に向けて取り組んできた。ここでは比較表現について取り上げる。

「比較表現」については、「～より」の理解が十分ではなく、述部に近い単語のほうを述部の主語とみなしたり、名詞や形容詞等の助詞以外だけを捉え（助詞が分からないため）、単語のイメージだけで答えを導き出したりする傾向があった。そのため、述部の形容詞の主語は「～が（は）」にあたる語であることが理解できるよう、「～が+形容詞」という形容詞が用いられる文型についての指導を行い、その上で、助詞「より」の指導を行った。

4. 本時の目標

「～より」の比較表現について理解し、2つのものの相対比較ができる。

「～より」の比較表現について理解し、3つのものの系列的な比較ができる。

5. 授業の様子

対象生徒が、比べる対象をイメージしやすいよう、身近な物を対象にした。「鉛筆はボールペンより長い。」という文章では、この文の言いたいことは、「鉛筆が（は）+長い」であって、「より」がくっついた名詞「ボールペン」は、言いたいことの比較対象としてもってきただけということがわかるよう、パワーポイントの中で品詞カードを使用・作成するなど、視覚教材を活用しながら指導を行った。その後、「消しゴムは筆箱より重い。」という、実際は筆箱が重い、文章表記は違う例文を使用して指導を行った。写真1のように示すことで、比較表現「より」がくっついた名詞は、言いたいことの比較対象としてもってきただけというイメージが着きやすく、理解が進んでいた。また、名詞や形容詞だけを捉え、頭にイメージした物に従って答えを導き出すことも減少した。

次に、3つのものの系列的な比較では、問題文を情報・助詞・述部の位置にカードを配置し、その横に、系列化のための物差しを表示した（写真2）。文を読みながら、カードを物差しの上に並べることで、3つのものの比較という推移律が見える形になり、文の意味を可視化していくことで、関係性についてはっきりと答えることができた。

6. 成果と課題

(1) 成果

- ・パワーポイントの中で品詞カードを使用・作成するなど、視覚教材を活用しながら指導を行うことで、比較表現「より」の意味理解につながった。
- ・文の意味を可視化していくことで、関係性についてはっきりと答えることができた。

(2) 課題

- ・学習した内容を日常生活の多くの場面に生かせるよう継続して指導が必要である。

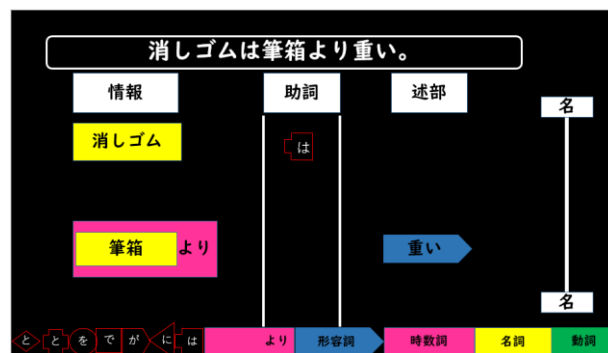


写真1 PPを使用している比較表現学習1

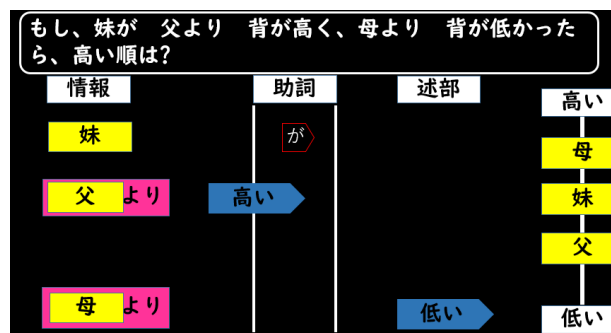


写真2 PPを使用している比較表現学習2

1. 対象児：中学部1年 1名（一般学級）

2. 単元名：1年 自立活動「比較文」

3. 児童の実態と授業の概要

本生徒は、両耳補聴器着用、口話での発音に課題や癖はあるが概ね聞き取りやすく、話しかけられた事もわりと聞き取れているように感じられた。しかし各学習面、生活面において日本語で書き現す力が弱く、Jcoss 日本語文法テストにおいても多くの課題があることが確認された。いくつかある課題のなかでも、比較文においては検査中から驚くほど、予想以上の理解度の低さがあらわになり、日常会話で時折かみ合わなくなる理由の一つとわかった。毎授業時に文法の学習として助詞の確認・学習をすすめながら課題に取り組んでいるが、勉強への苦手意識が強く、すぐ眠くなったり、終わる時間を気にして時計ばかりを見る等々、まだ幼く集中して取り組めない学習態度がみられる。しかし日常生活からの情報や本人の好きなゲームの話題となると身を乗り出して話したがる傾向が強く、それをいかした関心の高い話題を学習内容や例文として学ぶことで、間違えながらも積極的に文法学習へ取り組めるようになってきている。

4. 本時の目標

- ①情報を整理して、正しく理解する。
- ②序列を正しく理解する。

5. 授業の様子

比較で使用する「より」という言葉の理解、使い方について繰り返し学習を行った。この時期の話題「サッカー・ワールドカップ」予選試合の内容を活用し、ネット上の情報等で関心を高めて学習をすすめた。説明を聞き、状況を繰り返し確認することで、図1のようにスムーズに学ぶことができたように見えた。しかし、図2のように情報（条件）が増えることですぐに混乱してくる様子が現れた。ゲームに関する情報で色に着目した話

日本	は	ドイツ	より	強い。
日本	は	スペイン	より	強い。
ドイツ	は	スペイン	より	弱い。
日本		コスタリカ		強い。

図1

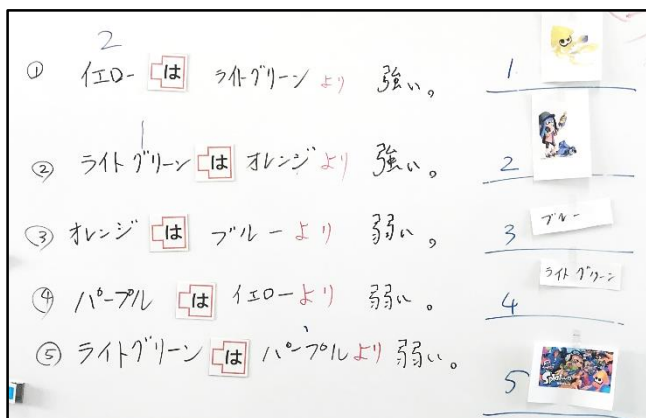


図2

題を例文として以下のように作り、強弱の序列を決める課題を示したところ、本人は強い関心をもって学習に取り組んだものの、思いもよらぬ方向へ序列が決められていく様子が伺えた。「より」の意味を理解するよりも、条件全体のなかから勝ち負けの数で判断しようとしており、結果、途中でどうにもならない状態で膠着してしまった。そこで一つずつ条件を確認し、カードを移動させていくように、一、二問を一緒に考えていくと、その先を察して生徒自身で考えはじめ、うまく序列をめる事ができ、自信をもって報告してきていた。

6. 成果と課題

(1) 成果

情報を整理して読み取り、課題例文を繰り返し学ぶことで理解がすすんでいる。Jcoss で再度、確認すると、そこでの比較文の課題は理解できるようになっている。

(2) 課題

単文による比較文の理解はすすんだが、まだ繰り返し学習して定着をはかる必要がある。また形容詞が加わり複文になると混乱してしまう。動詞、助詞の学習を継続することで情報を整理して理解できるようにし、比較する思考的な学びもすすめていきたい。